

国際学会出席印象記

第 27 回国際心理学会議に参加して

白梅学園短期大学 林 潔

第 27 回国際心理学会議 (XXVII International Congress of Psychology) は 7 月 23 日から 28 日までの 6 日間、ストックホルムで開催されました。海外渡航の事情が現在とは異なりますが、約 50 年前に開催されたこの国際心理学会議への我が国からの参加者は 2 人に過ぎなかったそうです。しかし今回は、我が国からの参加者は 500 人を超え、アメリカを抜く参加者数になったといわれています。最近の我が国の心理学に対する関心の高さがうかがわれます。

そのようなことで、会場では日本人の姿が、特にポスターセッションの場で目立ちました。あわせて次期第 28 回国際会議の主催国である中国人が、積極的に発表をされているのも目に留まりました。ちなみに、今回は 2004 年 8 月に北京で開催されます。

日本応用心理学会からも理事、会員の先生方が多数参加され、発表をされていました。また常任理事の福原先生は“Counseling young people”および“Quality of Life for the old in the Japanese Culture”というテーマで、長塚先生は“Problems of researchers, practices and solutions in applied psychology”というテーマで、それぞれシンポジウムに参加／企画をされておられました。

また、内外を問わず、かなり工夫が凝らされてい

る発表方法をとっている方々が印象に残ります。発表の内容と併せて、いかに自分の発表をわかってもらおうかという、プレゼンテーションの能力も併せて問われる時代になって来たのでしょうか。我が国でもプレゼンテーションの方法について、特に訓練をしている大学があると聞きました。難しい内容をわかりやすく説明されているというのも、訓練の賜なのかも知れません。

発表のトピックスは、歴史と理論、研究法と統計から始まり、産業・組織心理学、環境心理学などの 28 の領域にわたっています。朝 8 時半から 6 時半までの膨大なプログラムのどこのセクションに出るかによって、学会の印象は違ってきます。私がうかがった範囲では、健康心理学関連の分野で我が国の方々が活躍されていることが特に印象に残りました。これまでの行動医学の知見の蓄積が、この背景にあります。

学問が細分化の途を進むのも、必然的な流れでしょう。しかし、分化と統合のバランスが崩れた時、その学問の危機が訪れるのかも知れません。さまざまな領域、さまざまな国の心理学者が一同に会する場で、ふとそのようなことを考えました。